令和4年度 第3回江別市未来型政策検討会議 会議録（要点筆記）

日 時：令和5年1月19日（木）午後3時30分から4時43分まで

場 所：江別市教育庁舎 1階 大会議室

出席委員：明神知委員長、龍田昌樹委員、布施望委員、佐藤誠一委員
渡邊愼哉委員、佐藤和夫委員、川口圭太委員、干野里佳委員
（計8名）

欠 席 者：北川裕治委員、長谷川伸委員、吉田光岐委員、浅井貴也委員
鈴木秀明委員（計5名）

事 務 局：川上企画政策部長、伊藤次長、堂前室長、デジタル政策室天明屋参
事、池田参事、鈴木主査、坂口主査、木村主査

傍 聴 者：なし

会議概要

1 開会

2 議事

（1）江別市DX推進方針（仮称）骨子案について

～事務局説明～

○明神委員長

DXの推進方針について、具体的にどんな取組を行うかがたくさん記載されているが、行った後にどういう姿、形にするかという目標、つまり何を指して行うかがはっきりしない。交付金や補助金を活用して施策を行ったとしても、様々な事業を少しずつ実施して、結果的に困るような気がしている。

DXというものは、住民やユーザーなどの人間中心という考え方が最初にあるべきだと思う。どうしてもテクノロジーに走ってしまうので、ハードが中心になってしまうようなおそれがある。

市民が自ら動いて幸福や生きがいなどを見つけていく、そのような地域にすべきで、行政が行うことは限られていると思う。これは佐藤（誠）委員が取組んでいるようなことだと思う。

先日見たNHKのニュースで、神戸市長田区の高取では定期的に地域の住民が防災訓練を行っており、消防よりも前に、地域の人がまず自分たちで火を消すという活動をしている。

自分たちで地域を守るという活動をしている人がたくさんいると、行政から

のアクションを待っているだけではなく、住民が住民を支えるという考え方が根付いていくと思う。

いずれにしても、現時点では方針の策定によって目指す目標、ゴールがはっきりしてないと思うので、委員の皆様の意見をお聞きしたい。

○佐藤誠一委員

よく言われるのが市民が皆バラバラであり、住民同士がつながっていない。自治会に導入するアプリの運用においては、パスワードが覚えられない、やり方を忘れたなどの質問が多いので、誰かがIDとパスワードの管理をしなければならない。

会費の納入においても、様々な手法がある。DXの観点で考えると、江別ペイみたいなものを作っていたら、全部そこで支払いが出来るようになると、班長さんの負担も一気に軽減されるので、自治会のDXにつながると思う。

○明神委員長

住民同士がつながるためには、セキュリティの問題もある。お金もかかるが、安心な手法を選択していくべきだと思う。

情報大学では、グーグルのサービスを利用して2段階認証を行っており、認証後、グーグルのEメールやブラウザを活用して共有している。学生にも2段階認証をさせる。一般的には不便にはなるが、一旦信用出来るプラットフォームが出来れば便利になると思うので、それもひとつの手だと思う。

佐藤(誠)委員の自治会では、サイボウズ系のグループウェアを利用していると聞き、すごく進んでいると思った。住民が色々迷わずに安心出来るよう、推奨出来るものを作るのもひとつの手だと思う。江別市には色んな優れた人がいるので、そのデータベースを作るというのもひとつである。活動的なコミュニティを作っていくことも、DXの基盤であると思う。

○龍田委員

今日は、全体像を見ながら方向性としてどうかというところを議論していく場だと認識している。

私は比較的同世代の中ではDXというか、デジタル分野に対しては明るい方だと自分では思っていて、そういうことを買ったり利用することが非常に多い。

例えば、私は音楽をかけることを趣味で行っていて、アナログのレコードを6,000枚くらい持っている。DJみたいなことを行いにどちらかの店に行く時にその6,000枚から選んで段ボール2箱を持って行くとすごく重くて

大変である。しかし、パソコンのハードディスクに入れると6,000枚全部持って行けるので、圧倒的に便利である。一旦デジタル化した音源は余程のことがない限り劣化は生じないことを考えると、音楽や映像をデジタル化していくことに対しては良いと思う。

しかし、アナログはアナログの良さがある。例えば、本である。紙を辞めていこうというような社会の風潮になっていて、こういう会議の資料の紙がいるかいないかは別の議論として、電子書籍化した場合、本を読む人がいなくなっていったという副産物も生まれてしまった。今の若い子たちは、デジタルで本を買って読むかというと時代遅れのメディアとして扱われていて、T i k T o kのような短い動画で日々の余暇を楽しむような流れになってきている。

これは、果たして世の中が豊かになっているかということ、そうではないと思う。デジタル化して良いものとデジタル化しない方が良いものがあると思う。

先程、母子手帳のデジタル化とあった。今回、マイナンバーカードを作るにあたり、子どもたちが自分を証明する何かを持って行かなければならなかったが、顔写真付きのものがない方は母子手帳で対応ができた。母子手帳を家中探して子どもたちの母子手帳を出した時には懐かしいという話になった。これは昔読んでいた本を見つけた時の喜びのような感じで、デジタルであればあっても良いかもしれないが、こういうひとつものとして残すということへの執着やノスタルジックな話になるがそういうものがあると思う。

何でもかんでも国の施策に則ってすべてをデジタル化していく、オンラインですべてつないで、何もかもつながる世の中にしていくことも有りなのかもしれないが、逆に、変わらない方が良いものを炙り出していくことも必要だと思っている。

ただ、今の世の中は圧倒的にデジタル化していく方がスムーズであり、便利になっていく。限られた資源の中で新たなものを生み出すよりも、資源を欠けずに行うという流れには逆らえないと思うが、守りたいものが人それぞれ出てくるんじゃないかと思うので、あまり急いですべてのものを前に進めるよりは一旦立ち止まるようなタイミングがあり、そこで振返るような進み方をしてほしい。

○明神委員長

市民一人ひとりに自分らしい生き方があり、個性や価値観を大事にしていくべきだという趣旨だと理解した。全てデジタル化していくことが正しいわけではないということに注意して、自分らしい生き方を考えていくべきなのではないか。

○渡邊委員

先程明神委員長が、そもそもの目的という表現をされたので、私もまさにそれを感じていた。

今回提案にあがっている方針については、デジタル化されていないものをどんどんデジタル化していこうという話をここに盛り込んだと思うが、まず江別市はどんなまちなのか、そして将来はこういう江別市にしたいというビジョンがあって初めてどんなデジタル化をすれば良いかが決まると思う。

それが無いと、例えば札幌市でも同じ方針を立てることになると思うので、江別市らしいデジタル化ということを盛り込んでいくべきかと思う。

今デジタル化していないところを、どんどんデジタル化しましょうという考えはあり得るかもしれないが、それだけでは、これぞ江別市のデジタル化、DXだということが示せない可能性がある。

私自身は、江別市の中に最新のデジタル機器があちこちに見えているようなまちにはイメージしておらず、ちょっと田舎でちょっと都会の田園都市である風景を守りながら、実は中ではデジタル化されているという方向に、江別市がなってくれば良いと思っている。それを実現するにはどうしたら良いかといった順序で考えた方が、江別市らしいDXが出来るのではないのかと思う。

○明神委員長

元々原生林もあり、牧場町には別荘地のようなところもある。野幌の原生林の周りには丸太小屋みたいなものもある。札幌にも近いが、自然が豊かなところがあるので、札幌などから移住される人は、そういうようなものを求めて、来ているのではないかと思う。

これは行政審議会の方でも江別のあり方や課題に挙がっているが、その上であるべき姿を議論している。

○布施委員

農業の分野で話をすると、担い手不足が現実的な問題であり、スマート農業についても、多くの農家で意識し出しているところである。

世代的に若い担い手の人が定着しやすく、高齢者については、自分の目で見て自分が動かしてという部分が強く根付いている。ただ、実態的に人が少なくなり、農地が余っていくとなると、自分たちがこの地域を守るという意識があるので、分からないながらも取組もうとしていっている高齢者も多い。

今スマートフォンは高齢者も大分信用出来るような感じで使いこなしているので、スマートフォンを通じて何かをすることには入りやすい感じがする。

それをタブレットやパソコンなどの利用となると、面倒くさい、やらないと
なってしまうが、身近に持って動けるものに関しては入り込みやすい感じがす
る。実際にペーパーレスも進んできており、案内もLINEを通じて活用して
いるので、FAXは大分なくなっている。

農業におけるデジタル技術については、どんどん活用していきながら、今後
の方向性を検討していきたい。

○明神委員長

資料の中でも高齢者とかデジタルデバイドを防ぐという話があったが、孤立
化させないということが重要である。1人で全部やることになる大変なので、
皆さんがつながって、得意な人が手伝うこともあると思うので、どんな人がど
んなことに優れているという人のデータベースがあるとよい。札幌の方では人
物図鑑と言っているが、これを皆さんで共有することもひとつの手だと思う。

私の大学のゼミの話になるが、大麻の北の方に中田牧場という牧場がある。
そこでインターンシップを実施した際に、スマート酪農が出来ないかと言った
が、あそこは職人の優れた酪農家を育てるということを昔ながらのやり方で行
っている。スマート酪農というコストの高いものは入れにくいということだっ
たので、何らかのお金を捻出することは出来ない。

酪農家は割と夫婦で行っていることが多く、北海道は中小の酪農が多いと思
う。大きいところはスマート酪農が入るが、小さいところは無理なので、共同
購入のようなことが出来ないか。餌の手配、削蹄師や獣医の手配、ヘルパーを
お願いするなど、ある程度いくつかの酪農家が集まってグループを作り、共同
で購入することで原価が下がることも現実的にはある。そういうことで、いく
らまで出せたら共同体をつくれるかシミュレーションした。個別で頑張るの
ではなく、皆でつながって一緒にやれることはやる。

中小の酪農でも、個人個人のデジタル化もあるし、自治会もある。住民がつ
ながっている、皆で助け合って、新しいことに取組むというように自主的に動
くような住民を目指す。そういう考えもひとつの手である。

○佐藤和夫委員

農業や酪農に関しては委員長からお話あったとおりでと思う。一方で、小さ
いところは小さいところで、例えば、ヘルパー組合のところから人を呼びたい
と思ってもなかなか呼べないので、2、3件の酪農家で1人だと多かったと聞
いている。

DX推進方針については、交付金事業の性質をまだしっかり把握出来ていな
いので、何をどこまでどういうふうに言っているのか少し迷うが、資料2-1

の4ページにある策定の視点というところはこれで良いと思う。市として行う事業なので、行政サービスの効率が上がるということがこの事業で一番最初に達成すべきポイントになるかと思う。

江別は広いまちなので、色々な申請で窓口に来なければならなかったものが楽に出来るようになるだけでも、十分に価値があると思う。

ある程度広い範囲に及ぶような計画案が求められるという面がどうしてもあると想像するので、行政サービスの効率化は先程の視点にあったように市民目線での行政サービスの効率化ということが行われればそれで良いと思う。そういったことの波及効果として、徐々に人のつながりや町内会の活動などもしやすくなっていく。あるいは、市の方の業務負担が軽くなると人材を回したりすることも出来る。そういった形で振興につながっていくというのが、表には出しにくいかもしれないが、実質を取ろうという時にはその辺りをしっかり取れば良い。

○明神委員長

国から方針に沿って行っていけば良いことは理解しているが、市民目線で考えることが一番だと思う。それに向かった行政サービスの利便性向上や、職員業務効率がなければ、市民向けの利便性向上に向けてなかなか活動もやりにくい。こういう視点という意味でも優先順位が大事である。

○干野委員

デジタル田園都市国家構想の実現事例として、「書かないワンストップ窓口」という、北見市の事例概要を拝見した事がある。やはり住民サービスの向上ということであれば、江別市の庁舎の窓口というプランもあると思う。住民に対してワンストップというようなどころまで踏み込んで提案しても良いのではないかと思う。

江別市は子育て応援のまちというビジョンを掲げているにも拘らず、転入の手続きは本庁舎で出来るが、学籍に関するものは教育庁舎まで歩いて行かなければならないので、未就学児を抱えて保護者が転入手続きをすることは大変だということを知ったことがある。このような移動が大変な方、高齢者や乳幼児を抱えた方などが対象になってくると思うが、そういった方たちに対してもワンストップのサービスを実施しているということをビジョンで掲げていただくだけでもPRになるのではないか。

○渡邊委員

今の話に関連して、現在札幌市の中央区役所が建て替えをしている。

他の官庁等では、AIのカメラを使って顔認識でまず来た人を登録すると、どこの窓口でどういう人がどういう順序で辿ったかを自動認識して、そのルート効率化を分析使用する実証実験を検討している。

そういう意味のデジタル化は色んなところで出来るのではないかと思う。

○干野委員

どういった方式でも構わないと思うが、特に冬は道が凍ってる時には最初に着いた窓口ですべての関連の窓口の手続きが終わるような状態になれると外部の来客者の滞在時間も少なくなり、感染症予防についても効率的になってくると思う。

○明神委員長

おそらく窓口において申請するのに必要な他の情報がそこから取れば良い。

○干野委員

マイナンバーカードに紐づけすることで1か所で終わることが出来るというような展開になると、住民側にもマイナンバーカードを取得したほうがメリットがあるという動機にもつながる。

また、行政の方で作業時間も少なくなることにつながるので効率化が出来るようになる。

○川口委員

資料2-2のポイントになるのは地域社会のデジタル化というところで、この部分は江別市独自の特色を打ち出すところだと思っている。

特に、4ページの一番上にある自治会のデジタル化というところは、なかなか取組みにくいところだと思っていたので、思い切って打ち出したと感じた。

江別市は10万人以上の都市で、自治会活動などのつながりは少なくなってくる地域もあると思うが、江別市の場合は多分人口7割くらいは自治会に加入していると思う。ただ、そういう自治会の加入率や自治会の中で会員に加入する人が減っているなどの問題もよく聞く。

また、忙しくて自治会の活動が出来ない、高齢者で外に出にくい、面倒くさいなど色んな問題があると思うが、そういった課題のある中でデジタル化によってひとつ解消出来るところがあると思う。

住民が参加して自治会のデジタル化に取り組むことは難しいと思うが、表題で

出して、推進していこうという姿勢についてはとても期待出来る。

さらに、ここでは回覧板やオンライン会議などの内容を書いているが、これが進めば安否確認などの福祉的な課題も解消出来るような付加価値も広がっていく可能性もあるということで、ぜひこういうところでも広めていけるような推進活動が出来れば良いと思う。

○事務局

ビジョンという部分で委員長の問題提起から始まり、様々な意見をいただいた。そういった意見も踏まえて再度ビジョンについては検討させていただきたいと思う。人中心、住民目線、住民の主体性などの重要ワードも出てきたと理解しているので、そういった視点も踏まえながらになるかと思う。

江別市らしいデジタル化のような意見があった。この推進方針については資料2-1の4ページに構成としてDXの取組方針を示した自治体DX推進計画における重点取組事項を踏まえた取組事項がベースとなっている。国が示したものをベースに構築をしたという経過があったので、ここは自治体DXを中心に据えられている。ただ、それだけでは江別バージョンが作れないということで、さらに地域のデジタル化という部分を検討させていただいているという考え方になっている。

ご意見にあった役所の窓口のワンストップ化については、非常に必要な視点と考えている。ご存じのとおり、庁舎の建て替えの検討を進めている中でそういった視点は十分に検討の俎上に上ってこようかと考えている。我々デジタルサイドでの検討も必要だが、庁舎建て替えといったこうした違う視点や、行革の推進計画の中でも触れられているので併せて検討していけたらと考えている。

○渡邊委員

地域社会のデジタル化の中に行政手続きのオンライン化というところがある。ワンストップも良いし、オンライン化も良いが、全部住民の方から何かアクションを起こさなければいけないものなので、プッシュ型の取り組みもあると思います。

税金を取る時だけ郵便物が来る状況になっているので、そうではなく、行政側から住民の方にプッシュでレコメンドが来るような仕組みというのがあると、少し通常のデジタル化にプラスアルファの面白さがあると思うので、そういったことも検討して行ってほしい。

○明神委員長

たしかにそこまでいくとDXと言えるかもしれない。新しい価値を提供する。

その辺もチャレンジしていただきたい。

(2) デジタル田園都市国家構想推進交付金に係る進捗状況について

～事務局説明～

○明神委員長

選定委員会の委員長を務められた渡邊委員から何かあるか。

○渡邊委員

特にない。ただ、審査の時に気になったのは、こんなに短い期間で本当に出るのかというのが心配だった。情報大学ですと継続的に関わっていかれるということなので、そういう部分においては安心出来るのではないか。

○明神委員長

ちなみにクライムというのは前橋の会社か。

○事務局

そのとおりである。

3 その他

○佐藤誠一委員

自治会関連で情報提供したい。現在163自治会のうちの1自治会である新栄台西という自治会は724世帯ある。

前回も話をしたが、自治会として3年計画で1年毎に目標を決めることにして、1年目は区長12名、役員20名の32名をラインワークスでつなげようということにつながっている。その目的としては、班長から会費について軽減するために自動的に入金出来ないかということで、会費ペイというシステムの銀行振込というものを使い、クレジットなどは使うのを辞めた。その理由としては、それに対して不安な方がいるということで、自動的に銀行から年1回引き落とすというシステムを今回行った。その成果として、1月15日の集計で724世帯の中でそのシステムを利用したのは629名で全体の87%だった。また、直接銀行に振り込む人は43名で6%である。

1年目は、なるべく自治会の会計業務の負担を軽減しようということで協力していただいた結果、93%の方が参加して集金に行かなくても良いということになった。残りの52件は未対応ということだが、その中の約75%の39

名はやると言ってまだやっていないので、これはプッシュすることによって上がってくると思う。実際に5件の方だけが不満であるということで参加していないという現状があるが、これも理解していただければ0に近づくとと思う。また、自治会に入らない人を除いているので、0.7%の方が今現在で入金していただけていないことになる。

1年間頑張ったことにより、うちの自治会が若いとはいえ、それなりの理解度である。2年、3年と経つと当たり前の時代になる第一歩と考えている。

2年目からはよりスムーズにするために、今度は役員全体をラインワークスとグループウェアでつなげようとしている。

3年目は、キントーンを使い、全世帯724世帯をつなげるというような形で考えている。

先ほど言ったようにバラバラのものを使って工夫してお金のかからないように行っているが、これには3つのIDとパスワードを使うことになる。頻繁にIDやパスワードを忘れたという連絡が来るため、再設定する。それでもラインなどで連絡が出来るので、それはそれで対応は可能である。

最後に、自治会の役員、特に総務部長を含めた分析の結果、一見苦労しているが、それは会費を集めることで、集めた会費のほとんどは街灯の電気代や排雪費、ごみ収集の関係、回覧など全部役所と絡んでいることである。

なので、本来自治会がやるべき花壇やお祭りなどは新型コロナウイルス感染症で出来ないが、市と直結することの方が多いため、自治会のデジタル化のところもぜひ色々検討していただき、その部分がクリアされると非常に住みよい江別になると思う。

○明神委員長

自治会でそれほどIT化が進んでいるというのは驚きだが、そこは若い人の移住者が多い地域なのか。

○佐藤誠一委員

新栄台西自治会とって、江別の中では1番若い地域になる。

○明神委員長

お手本のような自治会だが、他のところは高齢化しているので、ゼミの若い学生が自治会に入って活性化するところもある。

○佐藤誠一委員

やっぱりポイントは現役世代で運営する自治会である。特に子どもがいる家

庭の方をお願いして役員をしていただく。そうすると、子どもも一緒に自治会活動に参加する。

高齢者の活動を頑張っても若い人は来ないが、若い者を中心にした活動をするとなんとなく高齢者がついてくる。そういった形でICT化も10年前から行っている。そういう活動が実ったことと、色々なシステムが無料で借りれたことで、今の自治会メンバーの若い人たちが中心になって行っている。

○明神委員長

お手本のように出来たら良い。子育ての子どもを中心に子どもを育てていく、そういうコミュニティが出来れば良いと思う。

4 閉会